

「使える日本語」を教えるための 「場面・機能・文型シラバス」の重要性

— 2019年度のフランス領マルティニークからの
外国人企業研修生に対する日本語指導をもとに —

中 西 久実子

キーワード：マルティニーク、日本語教育実習、場面・機能シラバス、文型シラバス

1. はじめに

本稿の目的は、「使える日本語」を教えるためには、「場面・機能シラバス」だけでなく、「文型シラバス」も融合して「場面・機能・文型シラバス」にすることが重要だと示すことである。分析には、2019年度の京都外国語大学外国語学部日本語学科の授業科目「実践日本語教育2」でおこなっている日本語指導の実習のデータを使用する。

「使える日本語」とは、中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子（2020）で示されているもので、何かを伝える必要があるときにその場面で効果的に運用できる日本語表現という意味である。「文法的」に対立する「非文法的」とか「適切」に対立する「不適切」などという意味で「使える／使えない」と言っているのではない。

1. 1 本研究の背景

本稿は、京都外国語大学外国語学部日本語学科の授業科目「実践日本語教育2」の教育実習を対象にした研究の一部である。この授業科目では、日本の企

業で研修をおこなう外国人が研修や研修中の日本での生活を円滑にするため、日本語教員志望の大学生が日本語指導を担当する活動を実習としておこなっている。この実習は、京都外国語大学の留学生別科に在籍したマルチニーク出身の外国人留学生が、日本-マルチニーク-グアドループ友好協会（Association Japon-Martinique-Guadeloupe）理事の山分志穂氏を通して筆者に企業研修生の日本語指導を依頼したことがきっかけとなっており、2015年度から2020年現在まで毎年1回（5月～8月までの約4か月間）実施している。

マルチニークとは、1946年に設置されたフランスの海外領土の1つで、カリブ海に浮かぶ西インド諸島の1つである。面積1,128平方キロ、人口約40万人の小さな島である。言語はフランス語圏で経済的には2002年にユーロ流通が始まり、砂糖、ラム酒、バナナ、パイナップルなど農業と観光業が経済の中心であるが、食料や日用品はフランス本土からの輸入に頼っている。

本研究の実習で日本語指導を受ける学習者は、日本-マルチニーク-グアドループ友好協会から紹介を受けたフランス語母語話者である。学習者はフランス本土および、フランス領マルチニークの学校「EGC MARTINIQUE」「Lycée Polyvalent Régional Nord Caraïbe」「Groupe ESC Troyes」に所属する学生で、毎年異なる学習者が来日する。この学習者たちの所属する学校では、マルチニークの教育機関の卒業要件として日本に留学し、日本の企業（「株式会社リカーマウンテン」「マッスル株式会社」「株式会社クラフト・ワークス」「株式会社タイムヒル」「株式会社服部モータース Shiga BMW ディーラー」「びわこの千松」など）で研修を受けることが義務づけられているからである。学習者たちは、日本での企業の研修の合間をぬって京都外国語大学で本研究の日本語指導を受ける。本研究の日本語指導の概要は中西久実子・井元麻美（2019）で示されている。

1. 2 本研究の意義

中西久実子・井元麻美（2019：28）では、企業の外国人研修としての日本語教育が、京都外国語大学で日本語教員を目指す大学院生・学部生・研究生（以

下、実習生)による日本語教壇実習の一環として大学内において無償でおこなわれた実践の概要と実践のメリットが示されている。中西久実子・井元麻美(2019)によれば、この実習は、学外の外国人企業研修生に日本語を無償で教える活動と、日本語教壇実習を融合させたものであり、両者にメリットがある。

具体的には、日本語教員志望の学生は、現場での見学と実践で自信をつけ、「卒業後の進路として日本語を選びたい」という強い意志をもてるようになる。また、日本の企業で研修するフランス語母語話者の学習者は、無償で気軽にサバイバルジャパニーズの授業を受けられるというメリットがある。

そして、学習者を職業研修生として受け入れる日本企業は、ビジネスマナーや簡単な日本語などの研修をおこなう必要がない。この点で、企業にとってメリットがある。さらに、本研究の実習は、日本に興味を抱き、日本とのビジネスにも貢献できる外国人の人材を育成するきっかけを作るという点で意義あるものであり、日本経済、日本文化の普及に資する活動となっている。

2. 問題のありか

本研究の日本語指導は、試行錯誤を重ね、毎年少しずつ問題を解決しつつあるが、問題がすべて解決されたわけではない。本稿では、その問題の1つである「日本語指導で使う教科書」に焦点を絞って分析する。

「日本語指導で使う教科書」の問題とは次のようなことである。

学習者は、実際に生活で使えるようになる便利な日本語表現を効率よく身につけたいと思っている。これに対して、実習生は、どんな場所でどんな日本語教員になるにしてもオールマイティに使える日本語教員の技能を効率よく身につけたいと思っている。この学習者側のメリットと実習生側のメリットをどちらも満たす教科書を選ぶことは非常に難しいということである。

初級の日本語教科書といえば、『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』がよく使用されている。しかし、この教科書は文型シラバスの教科書で、かな漢字表記でアルファベット表記や英語の翻訳はない。このような理由で、マルチニークの日本語指導には当初は『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』を採用しなかった。

本研究の日本語指導では、2015年度から2018年度までは学習者のメリットを優先し、場面・機能シラバスの教科書（『はじめのいっぽ』『まるごと 入門 りかい』）を使用してきた。

しかし、実習生側に問題が生じたため、2019年度に初めて実習生のメリットを優先した文型シラバスの教科書（『みんなの日本語初級本冊Ⅰ』）に変更し、場面・機能シラバスと文型シラバスを融合して「場面・機能・文型シラバス」を実践した。結論を先取りして示すと、この変更により、実習生にも学習者にも一定のメリットがある成果を得た。

本稿では、この教科書の変更による成果を明らかにする。そして、多様な学習者のニーズに応じた場面で「使える日本語」を身につけさせるためには、「場面・機能シラバス」だけでなく、「文型シラバス」の利点も取り入れ、両者を融合させて「場面・機能・文型シラバス」が重要になるということを主張する。

近年日本語教育では JF 日本語教育スタンダードが提示され、コミュニケーションで何ができるかという「can do」が重視され、もはや「文法は必要ない」とまで言われることが多い。たしかに、暗記するための文法は必要ない。しかし、本稿では、文法は「使える」ようになるために必要なものだということを主張する。

2. 1 2015年度から2018年度までの

場面・機能シラバスの教科書のメリット

本研究の日本語指導では、2015年度から2018年度まで表1のような教科書を使用し、場面・機能シラバスを直接法でおこなう授業を実践してきた。

場面・機能シラバスの教科書は、語彙や文型の量が少なく、ゼロ初級でかなも不安定な状態のフランス語母語話者にも負担が少ないからである。また、短時間で習得できる便利な表現が豊富で実際使用に直結しているからでもある。つまり、学習者のメリットを優先して場面・機能シラバスの教科書を選んだと言ってよい。このように、場面・機能シラバスの教科書は、学習者にはメリッ

表1 本研究の実習で使用した教科書

年 度	教 科 書 名	発 行 元
2015年度	『はじめのいっぽ』	スリーエーネットワーク
2016年度	『はじめのいっぽ』	スリーエーネットワーク
2017年度	『まるごと 入門 りかい』	国際交流基金
2018年度	『まるごと 入門 りかい』	国際交流基金

トの大きい選択であったと言える。

2. 2 場面・機能シラバスの教科書を

使用したことによる日本語教員養成の問題点

たしかに、場面・機能シラバスの教科書は学習者にメリットは大きい。しかし、本研究の実習では、日本語教員養成の実習生に次のような2つの問題が生じていた。第1はカリキュラムと関連する問題で、第2は実習生の成長という視点からみた問題である。

2. 2. 1 カリキュラムと関連する問題

本研究の日本語指導で場面・機能シラバスの教科書を使用することは、カリキュラムとの関連で次のような問題があった。

本研究の日本語指導は、京都外国語大学の日本語教員養成課程の一部の授業科目「実践日本語教育2」の受講者がおこなう。そのため、受講者が確定する5月初旬から実習開始（5月下旬）までの約2週間（2回の講義）で日本語指導の実習の準備を完了しなければならない。

しかし、残念なことに、現状では、実習生のほとんどは場面・機能シラバスの教科書（『はじめのいっぽ』『まるごと 入門』）になじみがなく、慣れるのに非常に時間がかかる。実習生（学部生2～4年次生）は、この教壇実習の前に、準備として別の授業科目で模擬授業をおこなうことが義務づけられているのだが、その模擬授業は、初級レベルの文型シラバスの総合日本語教科書『み

んなの日本語初級Ⅰ 本冊』(スリーエーネットワーク)を使っているためである。せっかく文型シラバスで模擬授業をしたのに、それを実習で試さないまままで終わってしまい、場面・機能シラバスの教科書の実習を始めるのである。前年度の文型シラバスの模擬授業の成果を活かせる実習がないまま、場面・機能シラバスの教科書の実習を始めるのでは、非効率的と言わざるを得ない。

2. 2. 2 実習生の成長という視点からみた問題

さらに、本研究の日本語指導で場面・機能シラバスの教科書を使用することは、下記の(1)～(3)のような問題も生じさせた。

- (1) 場面・機能シラバスの教科書では、文法説明が少ないので、実習生が日本語文法の勉強をするモチベーションが低下する。そのため、学習者から文法的な質問をされても答えられない日本語教員になってしまう恐れがある。

例) 「パリ☐行きます」と「パリ☑行きます」の違いが説明できない
例) 「きれくない」という誤用に対して、なぜ「きれいじゃないです」が正用なのか、根拠が説明できない。

- (2) 実習生は文法の正確さの意識が薄く、語彙や文型の積み上げやクラスコントロールを修得しにくい。

例) 既習語彙のコントロールができない。たとえば、「買います」と「買い物に行きます」が学習者にとって違う語彙であることに実習生が気づかないまま実習をおこなおうとする。

例) 流暢さを優先するため、正確さへの意識が低い。たとえば、「どっち」「どちら」を使ってもよいという意識が働きやすい。「じゃないです」「じゃありません」の違いを意識することの大切さに実習生が気づきにくい。

- (3) 実習生は日本語文法を体系的に学ぶことを重視しないので、中級や上級へと進む学習者がいた場合でも、文法の体系的な説明ができない。

上記の(1)～(3)のような問題があったため、2019年度からは、場面・機能シラバスの教科書の使用を中止し、文型シラバスの教科書(『みんなの日本語初級I本冊』)を使用することに変更した。そして、既存の「場面・機能シラバス」と「文型シラバス」を融合させ、あらたに「場面・機能・文型シラバス」というものを規定して試用することにした。

3. 場面・機能・文型シラバスとは

3. 1 場面・機能・文型シラバスの定義

場面・機能・文型シラバスとは、既存の「場面・機能シラバス」に「文型シラバス」の利点を融合させて本研究で独自に規定したシラバスのことで、何かを伝える必要があるときにその場面で効果的に運用できる日本語表現、すなわち、「使える日本語」を身につけるためのシラバスである。場面の導入から始め、その場面で必要になる機能の文型表現が段階的に積み上げられるように仕組みられた教える内容と定義づけられる。場面・機能・文型シラバスは、既存の「場面・機能シラバス」「文型シラバス」とは次の点において異なる。

既存の「場面・機能シラバス」は、ある場面で必要となる機能を重視して習得するという利点があるが、機能を重視するがゆえ、文型がランダムなため、段階的な積み上げがしにくいという問題がある。一方、場面・機能・文型シラバスでは、文型はランダムではなく段階的に積み上げられる。

また、既存の「文型シラバス」では、文型を単純な形で平易なものから複雑な構造で難解なものへと段階的に習得させることを重視するがゆえ、どんな場面でどう使うかは度外視され、使えるようになりにくいという欠点がある。これに対して、本研究で規定する「場面・機能・文型シラバス」では、学習者のニーズに応じた(学習者が必要な場面で、必要とする機能を)場面から導入し、その機能を満たす文型表現が使えるようになってから、次の新たな学習項目へと進む。ある場面で必要な文型表現が、段階的に単純な形で平易なものから複雑な構造で難解なものへと積み上げられていくのである。

「場面・機能・文型シラバス」の利点は、ある程度のまとまりのある文型表

現が積み上がったら、文型表現を体系的に捉えられるような文法知識のまとめあげを段階的に示すことが可能な点である。ある場面で使えるようになった表現について、その表現には文法が組み込まれていることを示すので、その文法をほかの機能にも応用できるのである。

3. 2 場面・機能・文型シラバスの実例

2019年度に使用した「場面・機能・文型シラバス」は以下の表2のとおりである。表2の中の教科書とは、『みんなの日本語初級I本冊』のことである。

表2の「目標の can do」とは、その課の語彙と文型を導入・練習させるのに、目標となる can do があるということを示している。

表2の「文型」というのは、場面・機能で導入されたとしても、必ず文型表現が示され、場面・機能と文型がリンクしているということを示している。

表2の「テスト」というのは、毎回の授業の始めにおこなう語彙テストとディクテーションテストのことである。ディクテーションテストは、前の授業の重要な文型表現を音声で聞いて書きとるテストで、前の授業が終わったときに、ディクテーションテストの範囲となる文型表現を3つ提示する。学習者は次の授業までにディクテーションテストの範囲になっている文型表現を暗記して書けるようにしておく。

2019年度の本研究の日本語指導において、表2のような「場面・機能・文型シラバス」を使用した結果、場面で必要になる機能だけでなく、文型表現も意識させることができ、段階的に「使える日本語」を身につけさせることができた。このことから、「場面・機能シラバス」だけでなく、「文型シラバス」の利点を融合させて「場面・機能・文型シラバス」を用いることは意義があるということがわかった。

表2のような「場面・機能・文型シラバス」は、一見しただけでは、既存の「場面・機能シラバス」とどう違うかわかりにくい。しかし、このシラバスは、機械的なりピートはおこなわないなどの使い方、つまり、教授法と組み合わせで使用することが重要である。

現段階では、その教授法はまだ確立できてはいないが、「場面・機能から文型」へとつなげるためには、教員と学習者の対話が必要になってくる。対話のような手法で「場面・機能・文型シラバス」を運用することが望ましいと考え

表2 2019年度「実践日本語教育2」で使用した場面・機能・文型シラバス

Date Teacher	教科 書の 課	目標の can do	文型 Sentence patterns	テスト Test
1回目 5月29日 ARe Hay	4課	You can ask about the detail of the shops in town. おすすめのお店についてきけます	～を食べます(他動詞) ～時に～ます ～は～時から～時までです	
2回目 6月5日 Ip Ty	4課 6課	したこと、することのせつめいができます You can explain what you did.	ます／ません／ました／ませんでした いっしょに～ませんか	4課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
3回目 6月12日 Kg Sw	6課	さそうことができます You can invite someone to somewhere.	〈場所〉～で～ます／～ましょう	6課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
4回目 6月19日 Ht	8課	わすれものについてせつめい ことができます You can describe and find what you lost.	～は〈い形容詞〉です 〈い形容詞〉です／くありません ～は〈い形容詞〉〈名詞〉です 〈な形容詞〉です／じゃありません ～は〈な形容詞〉〈名詞〉です	8課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
5回目 6月26日 Ty Ar	9課	You can introduce yourself じこしょうかことができます.	～が好きです・上手です・わかります ～は～があります ～から、～(理由)	9課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
6回目 7月3日 Sw Ha	13課	You can buy anything you like. かいものができます	あります・います わたしは～がほしいです ～を(が)マス形+たいです ～たいです・～たくないです ～へ〈ます形〉に行きます／来ます	13課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
7回目 7月10日 Ht	14課	おねがいができます ことわることができます You can refuse and make a request to someone.	テ形の活用 テ形+ください テ形+います	14課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test
8回目 7月17日 Kg Ip	17課 21課	いけんがいえます You can express your opinion.	ナイ形の活用 ナイ形+ないてください 普通形+と思います(意見)	21課ごいテスト Vocabulary test ディクテーション Dictation test

ている。

3. 3 場面・機能・文型シラバスを効果的に使うための

「対話のような教授法」とは

「場面・機能・文型シラバス」の効果を発揮させるためには、以下に示す1)～4)のような「対話のような教授法」で運用することが望ましい。

- 1) 導入は、場面の絵を見せることで始めなければならない。どんなときどく使うかという場面が学習者にわかるよう、その場面の状況把握の質問を一問一答式の対話形式でおこなう。
- 2) 日本語教員は、学習者より先に絵について説明してはいけない。絵の説明は学習者にさせるように対話を構成していく。
- 3) 文字はできるだけ使わない。口頭表現能力を伸ばすことを重視する。
- 4) 機械的にくり返し言わせることはしない。対話のなかで自然に何度も同じようなことを言わせるように仕組む。
- 5) 場面の絵について背景の知識を問うなどの一問一答式の発問を繰り返し、その場面で達成される機能は何かを引き出していく。たとえば、授業を休みたい学生が先生に「休んでもいいですか」と言いたそうな場面の絵を見せて、場所はどこか、誰が誰に話しかけているかななどを明らかにしていく。そして、「休ませてください」という発話が適していることへと自然な対話で導いていく。そして、さまざまな場面のヴァリエーションで「持たせてください」「使わせてください」「見させてください」「読ませてください」などの申し出ができるように導いていく。

上記の1)～5)を対話で導いていけば、ある場面で必要な機能が、文型表現を積み上げて段階的に、かつ、自然に習得できていく。場面・機能・文型シラバスは、場面と機能を意識したうえで、使える日本語を身につけていくものであり、従来の場面・機能シラバスと文型シラバスの折衷案とも言える。

4. 「場面・機能・文型シラバス」を試用した実習とその成果

4. では、2019年度の本研究の日本語指導（マルチニークからの企業研修生に日本語を教える日本語指導）の実習で、場面・機能・文型シラバスを試してみた成果を示す。

4. 1 2019年度の実習の概要と成果

4. 1. 1 2019年度に日本語指導を受けた学習者

（マルチニークからの企業研修生）

2019年度に本研究の日本語指導を受けた学習者は、表3の6名で、年齢は20-22歳であった。

表3 2019年度「実践日本語教育2」で日本語指導を受けた学習者

	学 習 者	性別	日本で研修する企業での職種
1	LGさん	女性	マーケティング，輸入小売
2	VKさん	女性	マーケティング
3	PLさん	男性	マーケティング 不動産会社
4	VRさん	男性	メカニック 車業
5	GLさん	女性	エンジニア
6	NCさん	女性	エンジニア

4. 1. 2 マルティニークからの企業研修生に対する日本語指導の担当者

2019年度に本研究の日本語指導を行った実習生は、表4の7名である。

表4 2018年度「実践日本語教育1」の模擬授業で担当した文型

実習生	所属学科	年次	母語	前年度（2018年度）に模擬授業を担当した文型
Tyさん	中国語学科	3年次生	日本語	これは～です、受身
Ipさん	日本語学科	2年次生	中国語	比較、受身
Haさん	日本語学科	2年次生	日本語	に行きます、受身
Arさん	日本語学科	2年次生	日本語	テ形、対比のは、はしますが、しません
Htさん	日本語学科	2年次生	日本語	テ形、たばかりです
Swさん	日本語学科	2年次生	日本語	あります・います、様態のそうです・ようです
Kgさん	日本語学科	2年次生	日本語	普通形、と・とき、伝聞のそうです、ようです

4. 2 「使える日本語」を教えるための

「場面・機能・文型シラバス」を試した成果

先述したとおり、2018年度まで本研究の実習では、場面・機能シラバスの教科書を使用していた。しかし、2019年度は文型シラバスの教科書『みんなの日本語初級I本冊』に変更した。ここでは、教科書を変更して、「場面・機能・文型シラバス」を試した成果を示す。

第1の成果は、模擬授業をおこなう授業科目と、実習をおこなう授業科目で同じ実習生が同じ文型を担当できるようになったことである。全員ではないが、一部の実習生たちは、前年度（2018年度）に授業科目「実践日本語教育1」に模擬授業で担当した文型を実習でも担当できた。表4の太字部分は、模擬授業の文型が、表2の実習の文型と一致していることを表している。模擬授業で担当した文型と同じ文型を実習で担当できた実習生は一部であったが、余計な負担なく実習ができた。さらに、実習の準備も円滑に進めることができた。実習で最初に担当する内容は、模擬授業と類似したものと関連があることが望ましいと言ってよいだろう。このように模擬授業と実習を関連づけることで、日本語教員養成課程の実習に一定の流れを作ることができたことは、教科書を変更した成果である。

第2の成果は、場面・機能シラバスと文型シラバスを融合させることができ

たことである。たとえ、短期間のサバイバルジャパニーズを教える場合でも、場面・機能と文型表現をリンクさせ、ある程度の文法説明をおこなうことによって、知識のまとめあげができる。また、「使える日本語」を初級から中級へと積み上げていくことが可能にもなる。

残念ながら、上記の2つの成果を数量的に実証できる調査などはまだおこなっていない。今後はこれを明らかにするための調査などをおこなうべきである。

5. おわりに

5. 1 本稿のまとめ

本稿では、「使える日本語」を教えるために必要な「場面・機能・文型シラバス」を使うことの重要性を示唆した。具体的には、京都外国語大学でおこなわれたマルチニークからの企業研修生に対する日本語指導を対象にして、以下1)～3)のことを示した。

- 1) 多様な学習者のニーズに応じた場面で「使える日本語」を身につけさせるためには、ある場面で必要になる機能だけでなく、文型表現も意識させることが必要である。そのためには、「場面・機能シラバス」に「文型シラバス」の利点を融合させて「場面・機能・文型シラバス」とするような工夫が必要である。
- 2) 「場面・機能・文型シラバス」では、学習者のニーズに応じた（学習者が必要な場面で、必要とする機能を）場面から導入し、その機能を満たす文型表現がその場面で使えるようにさせることができる。そして、ある文型表現が使えるようになってから、次に進む。ある場面で必要な文型表現が、段階的に単純な形で平易なものから複雑な構造で難解なものへと積み上げられていく。ある程度のまとまりのある文型表現が積みあがったら、文型表現を体系的に捉えられるような文法知識のまとめあげを段階的に示していく。ある場面で使えるようになった表現にも、文法が組み込まれていることを理解させ、応用ができるように導く。
- 3) 近年日本語教育では JF 日本語教育スタンダードが提示され、コミュニ

ケーションで何ができるかという「can do」が重視され、もはや「文法は必要ない」とまで言われることが多いが、文法は「使える」ようになるために必要なものである。

- 4) 模擬授業と実習でおこなう文型は、実習の初めのうちは類似したものであれば、実習生の負担が軽減でき、実習の準備も円滑に進めることができる。

5. 2 今後の課題

本稿では、「場面・機能・文型シラバス」の重要性を示したが、その効果を論証する調査は実施できていない。今後はその効果を示す調査をおこなう必要がある。

そして、このシラバスを使うのに適した「対話のような教授法」もまだ確立できていない。今後は、教授法を確立することが必要である。

さらに、実習や日本語学習の評価についても今後具体的な試案を作成していく必要がある。

参考文献

- 朝倉淳子（2003）『日本語教育実習生の発達過程に関する質的研究－ダイアリ分析手法を用いて－』 大阪大学大学院文学研究科平成十五年度博士論文（課程）。
- 岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』 凡人社。
- 岡崎敏雄・西川寿美（1993）「学習者のやりとりを通じた教師の成長」『日本語学』12, pp.31-41, 明治書院。
- 岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習』 アルク。
- 中西久実子（2008）「日本語教育実習生のダイアリにおけるインプットとアウトプットの再構築」『無差』15, pp.33-45, 京都外国語大学日本語学科。
- 中西久実子（2010）「日本語教育実習における WEB ダイアリの有効性」『無差』17, pp.77-100, 京都外国語大学日本語学科。
- 中西久実子・井元麻美（2019）「日本語教員養成課程の日本語教壇実習と外国人企業研修生の日本語学習－日本語教員志望の実習生のメリットと学外から通う日本語学習者のメリット－」『国際言語文化』5号, pp.15-32, 国際言語文化学会。
- 中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子（2020）『使える日本語文法ガイドブック

- クーやさしい日本語で教室と文法をつなぐ』 ひつじ書房.
- チャールズ・ボンウェル、ジェームズ・エイソン(著)、高橋悟(監訳)(2017)『最初に読みたいアクティブラーニングの本』海文堂出版株式会社.
- 松尾睦(2010)「教師の熟達化と経験学習」『日本語教育』144, pp.26-37, 日本語教育学会.
- 森玲奈(2009)「ワークショップ実践家のデザインにおける熟達過程—デザインの方法における変容の契機に着目して—」日本教育工学会論文誌33(1), pp.51-62, 日本教育工学会.

